〔日本書紀一神代〕一書曰、〇略中于時伊弉冊尊恨曰、何不用要言、令吾耻辱、乃遣泉津醜女八人一云泉津日狹女追留之、故伊弉諾尊拔劒背揮以逃矣、因投黑鬘、此卽化成蒲陶、

〔源氏物語二十三初音〕御ぐしなどもいたくさがり過にけり、やさしきかたにはあらねど、えびかづらしてぞつくろひ給ふべき、

〔河海抄十初音〕えびかづらしてぞつくろひ給べき　日本紀云、伊弉諾投黑鬘、此卽化成蒲萄、此故にかづらをえびかづらといへる也、

〔和漢三才圖會二十五容飾具〕髧　音刺　和名加都良、俗云加毛之、髮音備　髢音第

髧、婦人首飾、編次髮長短爲之、以爲飾也、〇略中按、髧、大抵長者三尺許、琉球髧五六尺以獻上之、

〔和漢三才圖會十二支體〕髮

髮少者所以被助其髮者、曰髧、カツラ和名加都良

〔歷世女裝考四〕かもじの事

かもじの本名はかづらといふ、〇略中かづらをかもじといふは、湯卷をゆもじ、內方をうもじなどと片名をとりてよぶ事、東山殿比の女言なり、文字には髮と書く、〇略中かづらは西土にてもいと古し、

〔守貞漫稿十女扮〕守貞云、古髮、和名加都良ナル者ハ、今ノ加文字ニテ、添トモ云ハ、自髮ニ添助ルノ意ニテ、乃チ假髮也、加文字、髢ノ字ヲ用フ、

〔源氏物語十五蓬生〕かたみにそへ給べきみなれ、ころもゝ去ほなれたれば、としへぬる去るしみせ給べきものなくて、我御ぐしのおちたりけるをとりあつめて、かづらにし給へるが、九尺よばかりにて、いときよらなるを、おかしげなるはこにいれて、むかしのくのえかうのいとかうばしき、ひとつぼぐしてたまふ、